# SJ

The Safety Japan
since 1971

Safety Report　セーフティルポ　高齢者

## 高齢者の安全意識の変化を促し、安全行動の実践へと導く

交通事故死者数を年齢層別にみると、高齢者（65 歳以上）の割合は 55.7%（平成 30 年）と半数以上を占めている。高齢者への交通安全教育は死者数の低減に向けて、大きな課題である。こうした状況を踏まえ、かねてより Honda は高齢者に焦点を当てた交通安全教育プログラムや教材の開発と全国各地の交通安全指導者への普及に取り組んでいる。今回は Honda のプログラムや教材を活用した高齢者への交通安全教育の事例を紹介する。

高齢者向け交通安全教室で楽集大学を活用する東近江市 市民環境部市民生活相談課交通安全係 茶野博子さん

後出しじゃんけんを通じて、認知・判断・操作のサイクルを高齢者に理解してもらう

### 事例 1　シルバー楽集大学　みんなの安全を守るために

#### 対象や開催時間に合わせて幅広く選択できるようにリニューアル

「シルバー楽集大学　みんなの安全を守るために（以下、楽集大学）」は歩行中（電動カート利用含む）・自転車乗用中・自動車乗車中の各場面で、高齢者自身の安全を守るためのポイントをわかりやすく紹介した教材で、全国各地の高齢者向け交通安全教室で活用されている。高齢者に多い交通事故事例をもとに日頃の自分の行動を振り返っていただくことで、安全への気づきを促す指導ができるようになっている。そして今年 3 月、ワークシートの改訂や追加により大きく刷新された。新しくなった楽集大学は 8 枚のワークシートで構成され、対象者や開催時間に合わせて必要なものを選んで使うことができるようになっている。

滋賀県・東近江市 市民環境部市民生活相談課交通安全係の茶野博子さんは楽集大学を 3 月 28 日に同市建部上中町で実施した交通安全教室の中に取り入れた。最初に、茶野さんは「100 歳を迎えて、ますます元気な人の長寿の秘訣として共通した 3 つの行動は何でしょうか？」と会場に集まった高齢者（75 歳以上）14 名に質問。その答えは、カラオケなどで「大きな声を出す」、折り紙や編み物などで「指先を使う」、体操など適度な運動で「身体を動かす」の 3 つ。「今から、この 3 つの要素を含む、後出しじゃんけんを皆さんとやってみたいと思います」と茶野さん。「最初はグー、じゃんけんぽん！」と高齢者に大きな声を出しながら腕を大きく振り上げ、茶野さんの手を見てから勝つ手を出す。これを数回行うと、次は茶野さんに負ける手を出してもらう。通常のじゃんけんとは違うため、手を出すまでに時間がかかったり、間違えてしまう人が出てくる。

「私の手を確認して（認知）、負けるために考え（判断）、指先を動かして（操作）、私に負けてもらいました。誰でもこれには、時間がかかります」。じゃんけんを交通行動の基本となる認知・判断・操作と関連づけて茶野さんは解説した。

#### 歩行中をはじめ様々な交通場面で重要な安全行動を理解してもらう

高齢者の交通死亡事故を状態別にみると、歩行中、自動車乗車中、自転車乗用中の順に多く、歩行中では横断歩道以外の横断中が最も多くなっているとワークシートを使って説明。

続いて、近くに横断歩道がない道路を渡る際、どのように行動するのが安全か、茶野さんは高齢者に尋ねる。ほぼ全員が「左右を確認する」と回答。「その通りです。まず止まって、顔だけでなく、おへそまで観る方向にしっかり向けてクルマの存在を確かめましょう。クルマが遠

Contents

P1　Safety Report セーフティルポ 高齢者
P4　Safety Report 子どもと保護者
P5　Close Up クローズアップ 交通教育センター
Safety Info. インフォメーション
P6　SJ Interview　科学警察研究所 交通科学部付主任研究官 藤田悟郎さん
Close Up クローズアップ 教育プログラム
P7　TRAFFIC SCOPE　交番参加者の行動を観察する
P8　危険予測トレーニング（KYT）
SJ クイズ

SAFETY-JAPAN

Safety for Everyone

Honda はすべての人の交通安全を願い活動しています。

SJ ホームページは　ホンダ　SJ　検索

編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒 107-8556 東京都港区南青山 2-1-1
TEL：03(5412)1736
https://www.honda.co.jp/safetyinfo/
編集人：中嶋英彦

※ご不明な点がございましたら、下記までお問合わせください。
㈱アストクリエイティブ安全運転普及本部係
TEL：03(5439)1191
E-mail：sj-mail@spirit.honda.co.jp

くに見えても、あっという間に近づいてきます。60km/hで走行しているクルマが１秒間に進む距離は約 17m。クルマが 100m 離れていても約６秒で目の前に来ることになりますから、クルマが通り過ぎてから再度、右、左、右を確認して横断することが安全です」。
さらに、斜め横断の危険性についても指摘。「斜めに渡るよりも、まっすぐに渡ることによって道路（車道）にいる時間が短くなるので、安全だといえます」。
夜間に外出する時は、自分の存在を周囲のクルマに知らせるため、白や黄色といった明るい色の服装を着たり、手首・足首などに反射材を身につけることで、ドライバーから発見されやすくなることも伝えた。また、オリジナルの教材を使って、夜間の色による視認性の違いを高齢者に確認してもらった。
高齢者の中には自転車を利用している人もいることから、自転車事故についても茶野さんは取り上げた。自転車事故を事故類型別にみると、最も多いのは出会い頭事故。
自転車で「止まれ」の標識がある交差点や見通しの悪い交差点を安全に渡るには、必ず止まること、距離感をつかむために頭を動かして両目で観ること、再発進する時は右後方の安全も確認することを強調した。楽集大学による指導が終わると、長寿の秘訣の１つが「大きな声を出す」ということから、「上を向いて歩こう」の交通安全替え歌を全員で歌う。
最後に、今回の交通安全教室のポイントを茶野さんは次のように「**な・が・い・き**」とまとめた。

**な**…ななめ横断事故のもと
**が**…がまん一分、ケガ一生
**い**…いちじ停止は絶対守る
**き**…きらっ！と光る反射材

受講した高齢者からは、「道路を横断する時は、よく考えて正しい判断をして渡らないと危険であることがわかりました」「普段は自転車に乗ることが多いので、出会い頭事故の話は参考になりました。信号機のない交差点では安全確認を心がけようと思います」という声が聞かれた。
茶野さんは「楽集大学は紙のワークシート形式になっているので、パソコンやプロジェクターが使えない場所でも活用できます。必要なワークシートだけを抜き出して使える点も便利です」と、そのメリットを話す。「今回の改訂で、ワークシートの説明文が簡潔になったので、ポイントを絞った説明ができるようになりました」。

安全に道路を横断するために必要なことを説明

建部上中町での交通安全教室に参加した高齢者の皆さん

ワークシートを使って、どのように道路や交差点を渡れば安全かを考えてもらった後に解説を行う

オリジナルの教材で夜間の色による視認性の違いを確認してもらう

ヒヤリハットマップで町内で注意してほしい危険箇所を示す

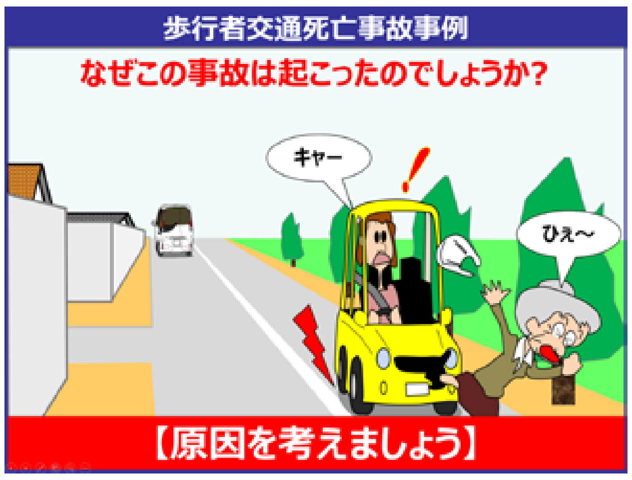
### 事例２　安全な道路の渡り方について

#### 横断後半に左側から来る<br>クルマとの事故を防ぐ

「安全な道路の渡り方について」は高齢者が歩行中に死亡した事故実態に基づき、高齢者の歩行中の典型的な事故を防ぐために開発された交通安全教育プログラムである。
高齢歩行者の死亡事故の代表的な形態は横断歩道以外の道路横断中に起きているケースで、（公財）交通事故総合分析センターの資料によれば、横断の前半よりも後半に左側から来るクルマと衝突する割合が高くなっている。その要因として、加齢による身体機能の低下とともに、ドライバーと歩行者の「見落とし」や「思い込み」などが考えられる。それらを高齢者に伝え、どのように行動すれば防げるかを高齢者自身に考えてもらうことが、このプログラムのねらいだ。
歩行者が横断中、事故に遭う過程を再現した映像（動画）を使って、道路横断を疑似体験できる内容（道路横断シミュレーション）を取り入れ、高齢者に意識と行動のミスマッチを理解してもらいながら、指導者が事故防止についてわかりやすく解説できる内容となっている。「昼間編」「視野編」「夜間編」という構成になっており、楽集大学同様、対象者や開催時間に合わせて必要なものを選んで使うことができる。
東近江市は３月 22 日に同市平尾町の高齢者（75 歳以上）10 名を対象にした交通安全教室において、このプログラムを使用した。
まずは「昼間編」。茶野さんは高齢者の交通死亡事故の特徴を理解してもらうためのクイズを使って、道路横断中に左側から来るクルマとの衝突が多いことを説明。事故にいたる過程を再現したアニメーションを見せて、原因として何が考えられるか尋ねた。高齢者からは「横断歩道ではないところを渡った」「左側から来ているクルマが見えなかった」「ドライバーが横断する歩行者に気づいていなかった」という声が上がる。
ここで、歩行者とドライバーはお互いがどのように見えているのか、それぞれの目線から撮影した映像を流す。歩行者は自分の右側から通過したクルマが死角となって左側から接近するクルマが見えなくなり、ドライバーはすれ違う対向車によって右側から横断してくる歩行者が見えなくなる。茶野さんは歩行者とクルマがお互いに死角に入ってしまうことで、双方が「いないはず」と思い込み、間違った判断をしてしまったことが事故の原因として考えられると解説した。

#### クルマは自分が思っているより<br>早く近づいてくることを体感

では、安全に道路を横断するにはどうすればいいか。高齢者の代表３名が道路横断シミュレーションを体験。ク



横断後半に左側から来るクルマとの事故を再現したアニメーション

歩行者とドライバー各々の目線から事故にいたるまでを映像で再現

ルマとの距離感はつかみにくく、自分が思っている以上に早く近づいてくることを受講者に気づいてもらうのである。代表者はスクリーンの左端に立ち、茶野さんの合図で足踏みをする。それと同時に、スクリーンに道路の左からクルマが接近する映像を再生。足踏みを始めて 8 秒後にスクリーンの奥から手前に向かってくるクルマとぶつかりそうになる。合図を出した時、映像のクルマは約 130 m先にいて 60km/h の速度でスクリーンの奥から手前に向かってくる設定になっているので、8 秒後には横断中の歩行者のところに到達。75 歳以上の平均歩行速度を 1m/ 秒とすると、道幅が 10m の道路を渡りきるのに 10 秒かかることになり、道路の中央を過ぎたあたりでぶつかってしまうのだ。茶野さんは、安全に渡るためには「クルマが通り過ぎてもすぐに渡らず、クルマが近づいていないか確認する」「クルマが遠くに見えても横断せずに通り過ぎるまで待つ」「渡れると思って横断を始めてもセンターラインの手前でクルマが近づいていないか、もう一度確認する」ことを強調した。

### 夜間はドライバーが<br>歩行者を発見しにくい

この後は「視野編」と「夜間編」。「視野編」では加齢に伴って視野が狭くなっているので、顔だけでなく、身体全体を左右に動かして、確認する方向に自分のへそを向けるよう茶野さんがアドバイスした。また、「夜間編」では夜、単路を走行するクルマのドライブレコーダーが記録した映像を流し、途中で道路を横断する歩行者を見つけてもらうことで、夜間はドライバーが道路を横断する歩行者を発見しにくいことを疑似体験してもらう。

「夜間は歩行者も反射材を身につけて、ドライバーに見つけてもらいやすくする必要があります」と茶野さんは反射材の効果を説明。また、ヘッドライトの「ハイビーム」と「ロービーム」でのドライバーからの歩行者の見え方の

「視野編」では近くのクルマだけに注目してしまうと後続車を見落とす危険があることを示す

ハイビームとロービームの照射範囲の違いなどについて、わかりやすく説明

クルマは自分が思っている以上に早く近づいてくることに気づいてもらうための道路横断シミュレーション

「夜間編」ではドライブレコーダーの映像などを使って、夜間は昼間よりもドライバーが歩行者を発見しにくいことを平尾町の皆さんに伝える

違いを示し、普段クルマを運転している高齢者には「夜間、対向車がいない時はロービームではなく、ハイビームを使ってください」と呼びかけた。

最後に、「今から守ってほしいこと」として、

①クルマが通り過ぎてもすぐに渡らない
②センターライン手前でもう一度確認
③身体全体（目とへそ）で安全確認
④反射材を着用しましょう

の 4 つをスクリーンに映し出す。これらを全員で唱和して、プログラムは終わった。

この日、受講した高齢者は「昔に比べると、道路が整備されていることもあって、スピードを出しているクルマが増えています。道路を渡る時はより慎重にならなければいけないと思いました」「映像を使って教えてもらえたので、わかりやすく、とても勉強になりました。これまで道路を渡る時に落ち着いて左右を観ていなかったので、これからは気をつけようと思います」「クルマを運転することが多いのですが、ドライバーの立場でも参考になる内容でした」と交通安全教室の感想を語った。

今回使用したプログラム「安全な道路の渡り方について」を茶野さんは次のように評価する。「映像を使った道路横断シミュレーションは高齢者の方にわかりやすく、好評です。また、ドライバー目線の映像を見せる点も効果的だと思います。人の振り見て我が振り直せのように、事故にいたる歩行者の行動を客観的に見ることで、注意すべき点に気づくことができるでしょう」。

東近江市では毎年、各地域の自治会長宛に高齢者向け交通安全教室の案内を送付し、開催希望を募っている。平成 30 年度の開催数は 68 回と目標とする 50 回を大きく上回った。茶野さんは高齢者に楽しく学んでもらいたいと、全員で歌うことや後出しじゃんけんなどのゲーム、腹話術人形とのかけ合いを教室の随所に取り入れるなど工夫している。

「高齢者の方は子どもたちの模範となる存在であってほしいと願い、交通安全教育に取り組んでいます。人生経験が豊富な方々なので、自分が今まで知らなかったことは印象に残りやすく、行動を変えていただくきっかけにもなるはずです。Honda のプログラムなどを活用することで、事故防止に必要な知識や気づきを提供していけると考えています」と茶野さんはいう。

## Honda の交通教育センターによる高齢者への安全運転教育

交通教育センターレインボー浜名湖では、静岡県内の各地に出向いて高齢者を対象に「動画 KYT 出張研修」を実施している。高齢者の運転中の事故防止を目的として静岡県が同センターに委託し、平成 23 年度にスタート。平成 30 年度は県内 19 ヵ所で約 600 名が研修を受講した。

動画 KYT とは Honda が開発した教育機器。実際の交通状況を再現した CG 動画を見ながら危険を予測し、その過程を受講者同士が振り返りながら話し合うことで安全運転を学べるようになっている。同センターの鈴木隆司所長は「認知・判断を伴う危険予測能力を高めることで、安全意識向上を図っています。ドライブレコーダーの映像も使いながら、高齢者の方々に実際の交通場面をイメージして考えていただけるように工夫しています」と話す。受講した高齢者からは「普段の運転の役に立つと思った」「講習内容がわかりやすい」などの声が聞かれ、好評だという。

動画 KYT による研修風景（写真はイメージ）

交通教育センターレインボー浜名湖 鈴木隆司所長